

# 三鷹市における防災・減災促進に係る災害看護の地域活動

杏林大学 保健学部看護学科 看護養護教育学専攻  
山内 亮子 齋藤 結香 古川 美和

## 背景・目的

頻発する自然災害に対し、地域住民が平時から「自助・共助」の力を育む支援を行い、誰もが安心して生活できる環境を整えることを目的とする。保健医療福祉の知識を持つ学生が主体的に関わることで、専門性の向上と防災意識の醸成を目指す。具体的な目標は以下の3点である。

1. **防災・減災意識の向上**：保健医療福祉の知識と生活知を交換し、災害を「自分事」として捉える
2. **緊急事態対応能力（自助）の強化**：実践的な学びを通じ、災害時に自らの命を守る行動力を共に身につける
3. **学び合いのコミュニティ形成**：住民と学生との交流を通じ、災害時における「顔の見える関係」と、互いに学び合い高め合う関係性を築く

## 実施内容

### 井の頭地区防災訓練（11月2日）

三鷹市立第五小学校にて、三鷹市井の頭地区住民協議会や住民と共に避難所運営訓練に参加した。



### Mitakaみんなの防災フェスタ（3月20日）

三鷹中央防災公園にて、災害看護に関する展示と、輪島朝市の特産品販売を行い、販売収益を「出張輪島朝市」へ寄付した。



### 勉強会の実施（3月17日）

京都看護大学の小原真理子教授を招聘し、「武蔵野市の防災活動と学生にもできる災害支援」をテーマとした勉強会を行った。災害看護の専門家として20年にわたり携わってきた防災活動の経験について学んだ。学生が三鷹市の地域住民から地域の現状を教わるなど、それぞれの立場から意見を出し合うことで、理解を深める機会となった。



## 活動の成果

### 1. 住民と学生の「学び合い」による意識変容

イベントや勉強会を通じ、住民からは「学生の可能性を感じた」、学生からは「地域特性や課題について大変勉強になった」という声が挙がった。この双方向のやり取りにより、災害への備えは地域全体で取り組む共通課題であるという認識が深まった。

### 2. 支援の垣根を越えた「共助」の基盤構築

住民を「支援を受ける側」だけでなく、豊かな経験を持つ「暮らしの名人」として捉え直した。学生と住民が互いに学び合う循環が生まれ、災害時に強みを活かし合える「顔の見える関係」が強化された。

### 3. 継続的な関心と行動の促進

防災フェスタでの販売収益を被災地に届けるプロセスを共有し、遠隔地からできる支援の形を共に模索した。被災地について学び、記憶し、伝えるという活動を通じて、「自分たちにもできることがある」という意識が学生の中に育まれた。

## 教育的効果

### 1. 「生活者の視点」の獲得

住民の生活背景や価値観に触れ、自分の知識が何に役立ち、何が足りないかを再認識した。異なる年代の意見を聴くことで、多様なニーズに対応する柔軟な思考が養われた。

### 2. コミュニケーションの質の変化

相手の経験を尊重しながら対話するスキルが向上した。住民から「ありがとう」という言葉を直接受けたことは、学生の向学心と専門職としてのアイデンティティ形成に寄与した。

### 3. 主体的な社会参画への意識

「自分たちにもできることがある」という実感を住民と共有し、地域社会を共に創る能動的な市民としての意識が芽生えた。これは将来、医療現場で患者や家族と協働する上での基礎となる学びであった。

## 今後の課題と展望

今回得られた「学び合い」の姿勢を、日常的な地域連携プログラムへ発展させることが課題である。今後は多学科との連携や、住民と学生が共に企画段階から参画する体制を構築し、「学び合い」をさらに強化していきたい。